

地球の中の熊本－世界の人々と、今、この私たち

日本語日本文学科 馬場 良二

1. 日本語教育的背景

私は、日本語教師で、1989年に熊本女子大学文学部に赴任してきました。同学部に、1988年に日本語教師養成課程が設置され、その授業が1989年にはじまったからです。

最初に「学校」の教壇に立ったのは、1982年の4月、東京、新宿駅南口にある文化外国語専門学校日本語科でした。同校は、1980年に開校し、私が採用された時点で、学生数は、30名足らずだったように思います。それが、毎年、倍々に膨れ上がっていきました。

当時の留学生は、ほとんどが台湾人でした。台湾人の友人が言うには、「日本の日本語教育は、台湾人のための日本語教育だ」。台湾人の中に数人の韓国人がいました。

1978年8月、福田赳夫政権下で日中平和友好条約が調印され、両国の関係が正常化、同年12月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議に改革開放政策が提出され、中国は市場経済へと移行しました。1980年代後半になって、大陸からの私費留学生が来はじめました。

そして、私が赴任してきた1989年、熊本の大学にいる留学生の大半は、中国人となっていました。

世紀をまたいで、日本語学校にあふれていた中国人は、2010年あたりを境に激減し、ベトナム人、ネパール人が多くなりました。

日本語教育では、学習者を、漢字系と非漢字系に、大きく二分します。前者は、漢字文化圏にあって、表記に漢字を使用する国からの学生、後者は、使用しない国からの学生です。ベトナムは、文化的には漢字系で、首都ハノイも「河内」のベトナム語読みだといい、ベトナム語の語彙には、漢字熟語が頻出します。ですが、漢字自体は使用されておらず、ベトナムの学生は非漢字系となります。

韓国は、政権が交代するごとに、漢字教育が盛んになったり、ハンゲルだけになったりですが、まだ漢字系と考えられます。

漢字系の学習者は、習得が早く、来日して日本語学校で学び、大学へ進学することが可能です。が、非漢字系の場合、むずかしい。

日本語教師として教壇に立つようになったころ、毎年、学生数が増えていきま

日本語学校の学生はベトナム、ネパールからの留学生となりました。

ネパールは、若い人の働くところがない、そして、政情が不安定だといいます。

ベトナムは、日本からの進出企業が多く、日本語力がそのままキャリアになるようです。ハノイでは、そこかしこで槌音高く建設が続き、バイク、スクーターが引きも切らずに駆け抜けますが、若い人の就職口はないといいます。だから、日本へ来る技能実習生^注には、国立の一流大学を卒業した学生もいます。

今、人は、地球規模で動いています。その原因は、経済的なものだけでなく、政治のうねり、時代の潮流など複雑です。ただ、言えることは、グローバルに人が動き、熊本はその地球上の一点だということです。

2. ベトナムについて

ネパールは、遠い。だから、2018年3月、ベトナム視察のため、ハノイを訪れました。

日本語学校を紹介、案内してもらうため、ハノイで日本語教師をしている中国人の教え子を頼りました。あいにく、母国に一時帰国中で、元同僚のベトナム人Z氏を紹介してくれました。

Z氏は、元技能実習生で、大阪に3年、帰国後は、日本語教師として活躍しています。ちょうど、技能実習生が母国で技能の普及ではなく日本語教育に従事している、これでいいのか、という話題が持ち上がっていたところで、幸運でした。

高校卒業後、来日を目指して日本語学校に通い、大使館の試験にパスして実現、今は、時々日本へ出張しながら、ハノイで日本語を教え、日本語学校の設立を目指しています。まさにジャパニーズ・ドリームで、大卒の同期より、はるかに高給を得ていました。

ハノイでは、日本語学校を5校視察しました。もっとも古いのが、技能実習生送り出しのために設立された国立の日本語学校で、1998年創立。新しいものは、ここ数年にできた学校です。

驚いたのは、寮です。日本語学校は、基本的に全寮制で、寮費込みの学費が月に5,000円から7,000円(食費別)。ハノイの平均月収が日本円で2万数千円というから、大変な額です。大きなビルの中に教室と寮があり、見せてもらいました。2段ベッドが4台並び、一切散らかっていません。私物はすべて、ロッカーに入れてあるのでしょう。洗濯物は、廊下の手すり壁に設置された物干しざおにさがっています。ハンガーにかけられ、同じ方向を向いた洗濯物が並んでいました。洗濯物の干し方も指導するそうです。

教室に入ると、学生全員が一斉に立ち上がり、大声で「ようこそ〇〇日本語学校へいらっしゃいました。どうぞよろしく願います」と挨拶します。挨拶は、

廊下でも徹底していて、必ず立ち止まって会釈します。「しつけ」だそうです。

東京のYMCA から来たという 50 代の女性教師は、幾分自嘲気味に「日本の日本語教育とは違います」とおっしゃっていました。学生たちの夢は、日本へ行き、働くことです。だから、日本人に気に入られるよう、しつけを徹底しなくてはいけない。そういうことだろうと思います。

60 代後半の男性教師、日本人にも会いました。ベトナムに 30 年、国と人とをこよなく愛していることが言葉とまなざしから伝わってきます。

学生たちは、日本を夢見ている。それをかなえるために、身を粉にする教師がいる。手塩にかけた子どもたちが幸せをつかむことを切に願っていることでしょう。そして、ひどい目に遭わぬことを祈っているに違いありません。

現地を見て分かったことは、ベトナムと日本、国と企業、学習者と教師と仲介人、大使館と日本語学校、すべてがシステムになっているということです。私が日本語学校に勤めはじめたころ、バブルの始まりの頃とは大違いです。あの頃の学生たちは、システムの一部に組み込まれてはいなかった。その人材流動のシステムを支えているものは、「グローバル社会」です。

あれ程に活況を呈し、多くの人が行き交う大都会で、働く場所がない、日本へ稼ぎに出る、それは、なぜか。ベトナムの社会体制、経済構造、多くの原因、理由があるでしょうが、要するに、これが「格差社会」なのだと思います。

そのシステムが、日本という国家の旗振りのもと、はるかに巨大なものへと変化しようとしています。

3. 私費外国人留学生について

大きく分けて、外国人留学生には、国費と私費があります。国費は、日本政府の奨学金を得て、来日する留学生で、国立大学に入学します。私立、公立大学に留学する外国人は、私費留学生です。

熊本県立大学には、学生寮がなく、外国人留学生用の奨学金制度も、学費減額、免除制度もありません。だから、私費外国人留学生はあまり受験しません。文学部日本語日本文学科では、平成に入って、数人が受験し、合格者は一人もいませんでした。現代日本語だけでなく、古文、文学史が受験科目にあり、点が取れないからです。そして、点が取れる留学生は、関東、関西の有名国立大学か、有名私立大学を受験します。

それが、2019 年度の入学試験に、中国人と韓国人、各 1 名が受験しました。二人ともに優秀で、かつてなら、東大、筑波、京大、阪大、慶応、早稲田しか受験しないような才能です。

一つには、日本語教育の教育力の底上げがあります。海外、国内の日本語教育

機関での教授の質が上がったことにより、日本語力の高い留学生が増えてきました。ネットにより、生の日本語にふんだんに触れられる環境も助けとなっています。

中国人は、出身高校と提携関係にある熊本の日本語学校に来て、本学を受験しました。韓国人は、母国の日本語学校の紹介で熊本を知り、ワーキングホリデーで気に入って、県大受験を決めました。地方都市であっても、官ではなく、民の力が、国際的な広がりを持つに至ったのです。まさにグローバル社会の実現です。

アルバイト代の高い地域にあって、寮も奨学金制度、学費減免、免除制度もある大学に行かず、熊本の県立大学を選んだのには、現代の若者の「価値観の多様性」が大きく関与しているに違いありません。

4. 熊本市内で働く韓国人

2月のある夕、国体道路と東バイパスの交差点近くのうどん屋に寄りました。隣の席に座ったのは韓国人の2人の青年でした。近くの会社に勤めていると言いますが、日本語は、ほとんど話せません。

平成の初め、知人の韓国人青年が熊本に来ました。熊本空港へ出迎えに行ったのですが、いつまでたっても、出て来ません。しばらくすると入管に呼ばれ、「馬場さんですか。この二人をご存知ですか」と聞かれました。私の身分などについて答え、「働かせないでください」と言われました。

2人の青年がどのようなビザで来たのか、分かりません。でも、技能実習生とは関係なく、熊本の企業が呼び寄せたようです。熊本市内、あるいは、県内に同様の外国人はどれくらいいるのでしょうか。

5. 韓国へ

外国人への日本語教育が本格化したのは、1983年の中曽根内閣によります。韓国での韓国語教育は、それに10年ほど遅れ、日本での日本語教育を参考にしています。が、共生社会の実現に関しては、韓国のほうがはやく、日本語教育や外国人花嫁、外国人労働者に対する法律、環境整備が進んでいます。それでも、日本を希望する実習生は、多かった。それが、昨今、韓国を希望するようになったと言います。

2018年の3月、ベトナムへ視察に行った時点でも、日本語学校で韓国語を教育し、韓国へ送り出していました。そして、今、日本行きを希望する学生より韓国行きを希望する学生のほうが多いと聞きます。4月に、技能実習生制度を刷新し、在留資格を新設しましたが、ベトナム人はもう来なくなるかもしれません。

アジアにおける労働力の争奪戦は、激しさを増しています。経済的な理由、給与の高さでは、韓国からも中国からももう来ません。ベトナムからも来なくなるか

もしれず、経済発展がさらに遅れているミャンマーからも、わかりません。経済の遅れている国、地域から、労働力を入れ、その国、地域が力を付けたら、次の国から、と活路を見出してきました。しかし、「経済の遅れている国」というのは、いつまで存在しているのでしょうか。

6. そして、これから

地球規模で人が動き、その流れを止めることは、できません。グローバルなシステムが構築され、日本は、さらに大きな一歩を踏み出しました。熊本は、その中の一点です。

日本は、人口減にあえいでいて、多くの労働力を必要としています。が、熊本は、どれほど多くの外国人、労働力、人材を必要としているのでしょうか。自然に囲まれた、人の心の温かい環境をアピールし、優秀で多様な価値観を持った若者、人たちに来てもらいましょう。

国籍、民族、文化の壁を越え、水俣病、ハンセン病、心身の障害への偏見のない、男女差や経済的な格差のない、フラットな社会を実現すれば、専門的知識を持つ自立した人たちがやってきます。

熊本の企業、学校がすでに国境を越えたネットワークを構築し、世界中からいろいろな人を惹きつけています。世界からの隣人を大切にしていきましょう。

これは、熊本県企画振興部企画課の依頼を受けて、2018年度の熊本県立大学地域貢献研究事業によって作成した報告書、「外国人留学生増加のためのアンケート調査の実施」の一部です。

企画課の担当の方をはじめとする、多くの方々、そして、熊本県立大学日本語教育研究室卒業生の村島未弥さんに、深く感謝いたします。

注 技能実習生とは、入国管理法における外国人の在留資格の一つです。研修生として技術や技能を実践的に学ぶために、研修を受けた企業等と雇用契約を結んで就労することができます。また、この制度のことを技能実習制度といいます。